

おい図書館

No.210

TEL 047-311-0886

 発行
代表
青木 和子
松本市牧の床 104-416

映画

「パブリック」



「図書館の奇跡」

千葉県議 安藤じゅん子

舞台は米国オハイオ州シンシナ

テイ。公共図書館の実直な図書館

員が、常連の利用者であるホーム

レスから「今夜は帰らない。ここ

を占拠する」と告げられたことか

ら始まる。大寒波の影響により路

上で凍死者が続出しているのに、

市の緊急シエルターがいっぱいで

行き場が無いというのだ。

彼は約70人のホームレスの苦境

を察して、3階に立てこもった彼

らと行動を共にし、出入口を封鎖

する。その行動は「代りの避難場

所」を求める平和的なデモだっ

たが、政治的なイメージアップ
を自論む市長選に立候補予定の
検察官の偏った主張や、メデイ
アのセンセーショナルな報道に
よって、彼は「アブナイ容疑者
に仕立てられる。」
やかて警察の機動隊が出動し、
追い詰められた彼とホームレス
達は驚愕の行動に出る…。

私の印象に残ったのは…コロ
ンの匂い。スチュアート（主役の
図書館員）の部屋で栽培される
バジルとプチトマト。図書館長
の「図書館は民主主義の最後の
砦」という言葉。10代の必読書
「怒りの葡萄」。次々と図書館

に寄せられる支援物資。封鎖した
図書館に入る時に必要な合言葉の
「プレインビザの値段」。彼とホ
ームレス達による「I Can See
Clearly Now（今は、ちゃんと見え
る）」の大合唱…などでした。

それはネタバレではないか！と
思われるかもしれませんが、絶対
に大丈夫です。知っていても笑え
ますし、泣けますし、元氣がでます。
ハラハラ、ドキドキ予測不可

能な展開に、一気にスチュアート
に感情移入していく。「理不尽」
に対して声をあげた彼らか、どう
か負けないで欲しい。次々と切ら
れる権力側のカードに対して、非
暴力不服従で挑む、決して諦めな
い彼の姿を全力応援していた。

「パブリック」図書館の奇跡と、
タイトル通り、図書館というパブリッ
クススペースの一夜を舞台に「パブ
リック公共」のあるべき姿や、
貧困問題といった難しいテー

マと一緒に考えよう。声をあげよう、必ず変えられる筈だから……と、まさにコロナ禍の今、分断著しい社会に11年かけて世に出てくれた監督兼主演のE・エス・テベスに感謝！笑ひあり涙あり。そして、体の芯から元気が出る！、映画を薦めて頂き、ありがとうございました。

松戸市議末松裕人

熱心なご推薦を頂き、久しぶりに映画館に足を運びました。今日の状況もあってか館内は閑散としていて気になりましたが、映画が始まると、いつの間にかそんなことも忘れて見入っていました。印象に残ったのは、国柄による人権や民主主義の捉え方の違いでした。米国では多く種による国家形成において、それこそ血を流して個人の権利を確保してきた歴史があり現在においても尚、人

種差別的側面が残っています。従って、人種や民主主義についての考え方がシビアに社会に根付いていて、そのあり方が個人の生命線にもなっています。この映画は、その事を図書館というパブリックな舞台での出来事を通して訴えかけているように思いました。

一方で、頭の中で比較しているのは、同胞性の高い我が国では、戦後に今日の民主主義が定着しましたが、それは米国のように血を流して獲得したものではなく、理想的な制度として啓蒙されて社会に定着したものと云えます。そのためか、米国と同じように普遍的な価値と捉えているものの、主権者意識に違いがあるのではないかという事です。このことの良し悪しではなく、米国のように強い権利意識が確立されていなくて

も、国民に一応の生活の安寧が保たれている我が国の有り様について、改めて考えました。

舞台となったシンシナティの公共図書館の持つ社会的意義が示されていたように思えます。一方で、日本の大方の図書館が教養娯楽の域を超えていないとすれば、それはこのような国柄の違いが一因となっているのでは……との思いに至りました。

表面的な報道で視聴者の興味を引こうとするメディアや、表面的なパフォーマンスで有権者の関心を集めようとする政治家は万国共通かもしれません。

それにしても、死ぬほど寒いのに、何も素っ裸になってバスに乗らなくても……ばどと思ひながら（？）覧になった方しかわかりませんが）帰路につきました。





神像子

台風が逸れてくれたので、柏キネマ旬報シアターへ出かけました。観客は10人未満でした。

私にとって気楽に楽しめるものではありませんでした。映画の冒頭、図書館の開館を待っていたホームレス達が洗面所へ直行し、歯みがき・洗面などを始めるシーンに、私は生理的な拒否感があることに気づいて、自分がいかに旧態依然たる「図書館像」を持っていたか、自覚せざるを得ませんでした。なので、その後も体を硬くして見ていたように思います。

安っぽいヒューマニズムで終わらせないでん返りがあった、映画としてはよくできているなあ、と思いました。史実はどうだったのかしら？あの図書館は今のどんな運営をしているのか知りたくなりました。

図書館長の最後のセリフ、図書館は、この国の民主主義の最後の砦。戦場にさせてたまるか！には唸りました。



松戸市議 増田薫

エンターテインメント性の強い映画ですが、本筋にあるのは「公共とは何か？」という問いかけではないでしょうか。

図書館員スチュアートは、自身も過去を持つさえない男。顔見知りのホームレス達が一夜の暖を取るため「図書館を占拠する」と訴えることに狼狽するも、どこか他人事とは思えなかったのではない。一歩間違えば自分もホームレスになっていたかもしれないのだ。

ホームレスにも様々な背景と人生がある。命よりも優先される規則とは一体何？「公共」の持つ意味は何？など、社会背景

の持つ問題についても描かれている。ホームレスのための緊急避難先が金く足りていない現状や、彼らの図書館占拠行動を政治利用しようとする市長候補の検察官、無責任にドラマチックな報道を自論おふスコミ。一方で心ある行動をとろうとするスチュアートと同じアパートの住人や図書館長。協力しようとする教会関係者達。切り捨てるのは簡単だが本当にそれで良いのか？どんな人にも生きる権利があるし、本来「公共」はその手助けをするべきで、社会は人と人との温かい関わりが必要なのではないか？…そんなメッセージが込められていると感じた。

ただ最後に、図書館を戦場の場にしないために占拠者全員が丸裸で出てくるシーン…「ホームレスなど全員が素裸になる事を承諾したのかな？」とか「外は極寒」という設定なのに寒くなくそううい

なんて、気にしなくてはなかつたですけれど……まあ、映画ですから!!



塩崎俊一

この映画の予告タイトルを見た時、連想したのは「ニューヨーク公共図書館であり、「図書館戦争」の両作品だった。そして、前知識無しで見た。たまげた!

この映画の舞台はオハイオ州シンシナティ市。連日報道された米大統領選で耳タコになったペンシルベニア州の西隣にあり、北には五大湖がいかえる。ここに大寒波が押し寄せる事から物語は始まる。このシチュエーションが肝であって当初企画されたカリフォルニアでは成り立たない。またこの一帯はトランプ大統領で有名になったラストベルト(錆びた工業地帯)でもある。そこで大寒波に襲われて行き先を失った大勢のホームレスが公共図書館に立てこも

り、事件が進む。このホームレスをとどめ保護に回った図書館員こそが、この映画の主人公である。

彼の判断と勇気に対し開館を迫る権力側との攻防。それを面白おかしく中継するテレビ局。このホームレス達の正体も次々に明かされて、人種や見た目で分らない立派な経歴の人も多い。しびれを切らした権力側がつい銃の放列を敷く。それを前にして出口から現れた彼らの光景は……見てのお楽しみだが、私にはその姿に非暴力不従の勝者であるカンジに思いかつてしまった。

映画のタイトルを分解すれば、この図書館員の奇跡的行動であり、図書館という公共施設の機能である。もし我が国が各種の災害で避難者が助けを求めた場合、公共施設の中で図書館が公助に当たる

だろうか。一般市民に対する公共の役割は、新しい公共としてパブリックを据えているのだから、改めて図書館を民主主義の柱とするならば、なんとしても自由平等を尊重せねばならない筈だ。今世界を覆うコロナ禍からの過剰な衛生至上主義による自由の自粛はある面で民主主義の欠落の一步かもしれない。問題提起の映画であり、何より数ある公共施設の中で図書館を舞台の中心としたのは流石アメリカ映画! となると、図書館は「知の拠点」であると同時に「命の拠点」になるのか。

余談だがシンシナティは1869年(明治2年)に世界最初のフットボールチーム「シンシナティ・レッドストッキングス」を生んだ都市で、緯度では岩手県盛岡市に相当する。最後に拍手したくなる映画である。